

特集Ⅱドキュメント「公害」
あやまち—1970年夏 四日市

詩 石垣りん
写真 中島 洋

○青空。

○フレアスタックの炎が、フレームインしてくる。

○四日市市街地からコンビナートへ。

○コンビナート空撮、校庭へ。

「詩」

四日市市で写した一冊のアルバムをお届けします。

物語も

事件らしい事件もない

これは 写真集です。

○

アルバムは 多くの場合

そうして残されました。

何でもない

どちらかといえは 平和な日に写され

やがて思い出のちいさいかたみと

なります。

事件はいつも そのあとにおこり

一枚一枚の写真を

なつかしいものにした

かなしいものにした

どうして知ることが出来ましょう。

ひと夏の記録が

のちの日のよるこびとなるか

なげきになるか。

○

けれど ここでは 確実に

何かが はじまっています。

戦争が はじまる前に 用意されていたよう

に。

一足はやく ここでは 何かが
はじまっております。

戦争ではないのですが—
何が はじまっているのでしょうか。

○タイトル「あやまち」



(四日市市立塩浜小学校・校歌)

港のほとり 並び立つ

科学の誇る 工場は

平和を守る 日本の

希望の 希望の 光です

塩浜っ小 塩浜っ小
僕たちは 築きます
明日の日本

○「磯津」の看板。

○船だまりロング。

○重く沈んだ磯津の町の中。

○ひっそりとした路地。

(幼児の鳴き声)

○黒いトタン塀—

○少女がのぞく。

○泣く少女のアップ。

○幼女、母親につれられて去る。

○黒い路地を走り去る少女のロング。

○墓地の中を走りすぎる少女。

○橋を走ってくる少年ロング。

(このあと、死んだ町磯津からかけ出してくる少女と、コンビナートの市街地からかけだ

してくる少年との、2人の走りのカット・バ

ック)

○海に浮かぶタンカー。

○海辺の堤防で遊ぶ少年と少女。

(なにげないが、可愛い2人の会話)

○入道雲。

○橋の上、コンビナート群へ向かって走る少

年と少女。

「詩」子供

子供が飛び出す。

子供がかけ出す。

工場と高速道路の間

きのうとあしたの間から

子供は 先へ行こうとしている
子供は とても急いでいる。

空がどんなにくさくさでも
海がどんなに汚れても

子供は伸びようとしている

手も

足も

目も

耳も

早くのびようとしている
子供がかけ出す。

○踏切の信号。

(耳に痛いほどのタンク車のきしんで通過する音)

○長い長いタンク車と踏切前の小さな少年と少女。

○銀座通りの看板、道路標識、どれもさびている。

(街頭ノイズ、警報機の音)

○銀座通りロング。

○町の中をけむりをはいて通る貨物列車。

○赤信号。

○踏切前でしゃがんでいる少年と少女。

○踏切、走りぬける。

「詩」視察

お正月に

東京からエライ人が視察に来ました。

町を歩く娘さんを見て

「公害、公害、というけれどみんな晴着を着

とるじゃないか」

と笑ったそうです。

エライ人というものは

ほんとに

エライことをいうものです。

○公害源

○スローのロング。

○る学。

○の。

○高みの見物をきる市。

○コンビナート前をく学と機

○道一号 標識、「東京

2

○車のとう。

○車のれの を走ってくる少年と少女ー正

うけ。と橋ーはしけが通りすぎる。

○橋の上で石を げる少年と少女のロング。



「詩」木

立っている。

立っている。

立っている。

が立っている

並んで立っている。

並んで立っている

きているものが立っている

並んで立っている。

高い がそびえ立つ町

もつと 事なもの立っている。

並んで立っている。

高い

高い

○フレアスタックの炎から の にフ

ーカス・イン。

○垣の上の。

○空きの、板 にズーム・イン。

○平さんの長へ カット。

「詩」算数

これは 話ではありません。 しい の立

な空き と人の んでいる 長い がり

合つて立っていました。

なら つ すことが出来ます。

人に がかりま ん。

つ

つ した の庭に

が 残されました。

が 残されました。

が 残されました。

だれもいなくなった庭に

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

は ききました。

むかしから っんでいる人たちですから
かんとんに っし出来ません。

は うち を 一 えるよ
れかかりそうな長

一の 長 は東 から
もう一の 長 は から
つかえ があてが れています。

いまにもく れ ちそうで
れることのできない らしが
の でくり されています。

はそうして長 の らしをかばい
長 の 子は をさえぎりました。

そのうちの 一
公害 だった、 平さんおじいさんは
はしから 目の の で
をつりました。

和41年 月10日。

に
「かよ子さん、ながらくお になりました。
おかげさまで 事も カズもあまるほ
どくれ、ありがとう いました。かたく
もうしておきます。」
と きました。

平さんのむすこの一 は、
ラルに しました。
さよなら、四日市

親が をつった の で
親に をつら た空の に
もうそれ 上いたたまれなくなつて
れを げて行きました。

コンビナートの街中に
の長 がえがく ルエット

ならちようどイコールのかたち
本の くくり

さよなら日本
どうしても一 がしあ になれなかった
よ、さよなら

これが 平さん一 の えです。



○ カット、長 を一 りして のへ。
○ (長 から こえてくる人の ノイズ子
供の泣き声、レビノイズなどと、詩の
れている間じ うバックに音)
○ の長、フカン。
○ ほのおのアップ。
○ な子供の足。
○ 校してくる子供たちのグループ(その

な声)
○ 「塩浜」看板。
○ 察をうける さ津子と母。
「で。つと れなかったの、 しい

しい
母「ちよつと物音がしても目を ましてしま
います。」
さ津子「しい。」

○ 校庭で校歌を歌う子供たちをバーン。
(塩浜小学校)

○ 空撮、校庭からズーム・ア トして、コン
ビナート、小さく学校が見えるまで。
(塩浜小の にだぶつて)

「詩」錆びる
四日市では
トタンがさびる
車がさびる

の がさびる
しい校歌がさびる
とても早くさびる

○ 立する。
(フレアスタックのノイズ)
○ 炎を き上げるフレアスタック。
○ 黒 をあげるフレアスタック。
「詩」匂い
四日市へ通ってくる小学校の先 がいいま
した。
「塩浜」の に着けば目をつむっていても
かります。
クインです。

レビはだ です。
いがうつりま ンから。

○ の向こうにかすむ磯津の町。
○ からズーム・ア トすると さ津子
のうら庭。
○ 先にす るさ津子。

○ ○ が黒 にかくれる。
を はく

「詩」ある晴れた日に
四日市の町に
で見ることが出来ます。

「よく見るがいい
この空の上では
でさえ がない
子供たちよ」

○ ○ さ津子の へ つくりとズーム・イン。
○ ○ き上げられる。 が する。

「詩」風
東 が くと
東 に む人がよろこぶ。

が くと
の人がよろこぶ。

に りかからない
人におよぶ

が とくをする
が とくをする

そういう が きはじ た
四日市の町に。

○ ○ 日に く コンビナート。
○ ○ いかかるような やけ雲。
○ ○ 磯津の町の中。

○ ○ 磯津の町の中。
○ ○ 月に 集っている (その
の 声)。

○ ○ 月。 の

○ ○ ラス に うつつた母と子。
○ ○ ク の な きからコンビナート
ーカス・イン。

○ ○ ン アのようなコンビナート。
○ ○ 津子の えるフレアスタックの
○ ○ 津子の ロング。
（を くような しい が く）

○ ○ しむさ津子の から母の へん。
○ ○ 津子の く コンビナート。
○ ○ さ津子の しく む。

母「 さ津子「 しい」
だけ」

○ ○ さ津子、 フル ャップ。 だけ
○ ○ さ津子、 そのさ津子へズーム・イン。
○ ○ カ ラ、

「詩」 苦い鬼

母親が が子を
の でかばいきれないと知ったとき
母親が いた手
子供を いきれないと知ったとき
母親は になる。

の 中なら
子 から り出すだろう。
車の前だったら きとばすだろう
の手で。

さ津子ちゃんの いお母さんは
さ津子ちゃんの しみを公にする。

がまんしておくれ
お母さんもおしてやれない
お母さんも けてやれない
お前のくるしみを
しみのままの で 間に し出すことで

さ津子
さ津子

お前のた に 間が手を してくれるように
お前の長い を ってくれるように

さ津子



○ ○ やけ雲からズーム・アートして い海。
○ ○ やけに えるコンビナート、その
く沈んだ磯津の町、 ン。

○ ○ 校庭くる一人のお母さん。
○ ○ お母さんたち と集ってくる。

「詩」 雫

校 にひとり
お母さんの があら れる
校庭を ぎってくる
校庭に い まれる

また たり があら れる
お母さんの がつて れる
を たら ける の重たさで

の重たさで
道の急いで
集ってくる。

一人の頭に
一人の目に
集ってひとつになる。

で け切れない 事が残ってしまった
集ってくる。

母親会
前が えるい
ほんとは 会
お母さん。
手をぬらして語り合いましょう。

○ えるさ津子の母のアップ。 いった

母「うちの子なんか を しますとダンス
のどつ手をにぎって しみます。 の手で
は っつてやるのが出来ま さん。 そんな
どうしたらよいか、みなさんにお きて
たいのです

○ き入る のお母さん。
○ び えるさ津子の母。
母「 を すたびに、 死にたい
ます。 一 に何 んとなく されま さん。 い
○ き入る のお母さん。
○ き入る お母さんたちへ ン。 ット。

○ プ。
のお母さんの 「こんなに しんでいる
子供たちがいるのに、 はほとんどなさ
れていないのです。 お母さんたちが、この
実 をあ らる機会に えてなんとかして
い かないと四日市の子供たちは、まだまだ
し られることになると思います。」

○ お母さんたちの 行、 ロング。
(街の とう、母親たちの え)

○ お母さんたちのアップ。
○ 人の ン人 (に)。
○ 人の いない 歩道。
○ 道路の 向 のしるし。

「詩」風船を持って
日あまり語り会って
かなしみや み とや を ち合けあつて

母親たちが行 ン。
炎 の街を く一 の れ
ましくなんかない
にぎやかな街 える街の中の
さみしいお母さん。

れは真夏の街に れて行った
れはそれ 上 くないで

街では
たくさんのが が りることはしても
一の 向に歩き出そうとしなかつたので
行 は った。
れは えた。

母親たちが去って行ったその先
母親たちの い。
あ の地 が きな れとなるのは
いつ、どこで だろう

○ 空撮。 コンビナートから磯津へ。
○ 磯津な てコンビナートが向うに見える。

「詩」ありさま
ここほ人間のた の町ではありま ン。
の ンエイのた の町です。

重 の ほ東京
の はの手
つと えば、まあ

だけが かされる。

あたたかい の通うことのない 地に
スと石 が通っています。
コンビナートの町に ンでいるのは
ほんとうに ンでいるのは
前からこの町にいた人たちは
行きたくても行き場のない人たちです。

○ の上をとぶトンビ。
○ (さいの かすかに)
○ ちぎにさまよう
○ 浜辺から 船へ ン。
○ こ れたカ
○ びたイカ
○ ア の向うにコンビナートの
○ まれた
○ 夏 と黒い 並み。

「詩」お母さんの昔語り
この辺
きれいな浜でしたん
たしら いちにち いで
に 船が っつてきますと
子供のこつてすやる
とれた コイ をもろうて
まだ きたまんまのを
こんな に の先でし っとし いて
たもんですけどなあ。

い お母さんの 語りは
もう さんでも
ほんの 年か 年ばかり前の四日市が
は にかしむかしの話となった。

○ れた磯。
○ (さい) 。 トラ ット。
○ 磯 ロング。

○少年と少女が遊んでいる。

〔詩〕くさい
磯津に 地 の いがしない。
の を 一 に える と

ほんとうの いがしない。
磯津に 磯の いがしない
に ほんとうの いがしない

少年と少女が磯で遊んでいる。
(何げない な会話)

○ をもってくる少年。
○ で遊 少年と少女。

〔詩〕生存競争
子供が立っている
むこうに が立っている

子供が をする
が をく

空ほたつたひとつ

ひるも
よるも

ををする子供
レン の をく
どっちが ちのこる

○コンビナートの日の にフ ーカス・イン。

○カ のアップ。
○カ で遊ぶ少年と少女。
(5人の会話にまじって)

〔詩〕利益
海を って もうけ
空を って もうけ

人 を って もうけ
いをした よりも

もつとあくどい会 のあきない。
としよりを って もうけ

子供を って もうけ
明日を って もうけ
もとの い 多、
港を って もうけ
を って もうけ
空を って ー。

○カ をく少女の可愛らしい。

○堤防の上を歩いてく少年と少女。
○ズーム・ア トして青空。
「塩浜」看板。

○入 をく えるさ津子のアップ。
（入 ノイズ、母親が声をかけるー
をすつて ー）

○（公害 の 声） の ラ。
○磯津中 通りをくる、 ロング。

○磯津橋をく

○ロング（コンビナートばかりが きくて
）
○「ー」の 。 公害 が磯津へ
やつて来た。

（うち の音）

○堤防で遊ぶ少年と少女。
○「ー」の 。へズーム・イン。

○「ー」の 。から ンして「コンビナート」
○日と から ンして「コンビナート」
○少年と少女、 ルエットで（5カット）

〔詩〕海が枯れてゆく
がみのりすぎると ー という では
お の を 一にする では

海のみどりをも いたしました。

しあ の です。

○ のアップ。
（のノイズに じって幼児の声、可愛ら
しく）
○フレアスタックの炎、フ ーカス・ア
トして、「す」のアップ。



○（す の鳴き声、く）
○「重」の鳴き声、く ーに。

〔詩〕よろこび
工場のまがり で
が鳴いた

まだ が鳴いているー
も少し立ち まってきこう
こんな で きています
まだ きています

かすかな いのちのあかし
たをは
一 ちいさなものの中に希望をみつけた
四日市の の道で

○「じつと座っているさ津子、フル ットで。
○「重」の

